

松本千代栄の「遊び」の実践における理論的背景 ——1947年「学校体育指導要綱」が示した「表現 遊び」に着目して——

北村桜（立教大学大学院）

1. 本発表の目的と研究背景

本発表では、松本千代栄（1920 - 2022）の「遊び」の実践における理論的背景を検討する。これを通して、松本が舞踊教育において、いかにして児童の「遊び」を舞踊の表現に接続しようとしたのかを明らかにする。具体的には、松本の奈良女子高等師範学校附属小学校教諭時代における実践、すなわち対象物になりきる児童の「遊び」を策励することで「情操の陶冶」を目指した実践に着目する。

日本の学校体育における舞踊教育は、1947年「学校体育指導要綱」を嚆矢として、児童が自ら作品を創作する「ダンス」の実践が位置づいたとされる。先行研究によると、戦前の舞踊教育は、体操科および体錬科の「遊戯」の一部に設定されていたが、その内実は既成作品を踊ることであったことから、既成作品の教え込みとして批判的に捉えられた。こうした問題意識のもと、1947年「学校体育指導要綱」に設定された「ダンス」には、児童自身が創作した作品を踊ることが主たる目的として明示される。しかし、カリキュラム編成の際に小学校低学年の「表現遊び」がダンス作品を創作する原点として位置づけられたものの、どのようにして「遊び」が児童の舞踊の表現に移行するのかが曖昧となる問題が生じたのである。

本発表では、1947年「学校体育指導要綱」の作成委員でもある松本の奈良女子高等師範学校附属小学校での実践記録を中心に、松本が「遊び」の実践から児童の舞踊の表現をいかにして引き出そうとしたのかを描き出すことを試みる。松本の「遊び」の実践を検討することによって、ダンス作品を創作する活動に限らない、「遊び」を通じた児童の「情操の陶冶」を基盤とする舞踊教育の様相が明らかになるだろう。

本発表の手順は以下の通りである。まず1947年「学校体育指導要綱」が示した「表現」に対する評価を概観する(1)。次に、松本の実践記録を用いて、「情操の陶冶」を基盤とした舞踊教育の内実を検討する(2)。最終的に、松本は「遊び」を創作のてがかりとして位置づけながら、舞踊の表現には対象物の観察や作品の鑑賞が必要であるとした点を論じる(3)。

2. 1947年「学校体育指導要綱」における「表現」としての「ダンス」

1947年「学校体育指導要綱」における「ダンス」の小学校段階の内容を確認すると、小学校低学年

では「表現遊び」、小学校高学年では女子にのみ「表現」として設定される。戸倉ハルや伊澤エイらの議論では、「学校体育指導要綱」の「ダンス」が「表現」として強調されたことに関して、模倣的な表現もある種の創作的な表現として位置づけることが示される。すなわち、人間において完全な模倣は存在せず、模倣にも常に創作が伴うという解釈が用いられる。ただしここでは、児童自らの表現を重んじる傾向が強まる中で、体育科における「ダンス」の表現それ自体が美的である必要性をどの程度求めるのか、美的であるならば児童の舞踊の表現をある特定の技術として捉えるべきか、という問題が長らく議論され続けてきたことを指摘する。

3. 松本千代栄が論じる「情操の陶冶」と「遊び」

松本は、「学校体育指導要綱」によって、「保健的効果」のベールが剥がれ「情操の陶冶」としての「ダンス」が明瞭になったと述べる。松本の「情操の陶冶」に関する論考は、奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会が刊行する『学習研究』第2巻第11号（1948年）で示される。なお、同号には当時小学校主事であった重松鷹泰や他の教師らも情操教育について論じており、とりわけ、情操教育の目的が自己の欲求に対して「正常なる位置を与えること」であるといった議論が展開されていた。松本自身も、児童の「美的情操」を養うことを舞踊教育の目標に掲げた上で、「美しいものを受容しうるだけでは真に美的情操をもちうるとは言い得ない」とする。つまり、「美的情操」を養うこととは美しいものを単に受容することではなく、自分自身の欲求に即して表現することと密接に関わるのである。

松本は児童が「遊び」として「身振り」の実践を行うことを、表現の導入として設定する。「身振り」の実践は、児童が対象物を模倣する活動であり、どのような部分を観察し模倣するのかわによって児童の個性が豊かに表れるという。だからこそ、松本は「身振り」によって児童自身の欲求に即した表現が可能になると述べる。松本は、こうした「身振り」の実践にみられる小学校低学年の模倣的行為を、表現の前段階として重要な「没入」状態であると論じる。小学校第4学年以降になると、舞踊の表現の「自覚」が生まれ、より上手に表現しようとする意欲が芽生えることで、基礎的な運動を行うことに意義が見出され始めるのだという。ここで注目すべきことは、小学校低学年の「没入」状態が、単なる「遊び」ではなく対象物になりきる感覚を身につけるための重要な過程として設定されることである。すなわち、松本は模倣的行為における「没入」状態こそ、表現への接続に欠かせない要素であると位置づけるのである。